

東京・春・音楽祭2020

東京春祭マラソン・コンサート vol.10

ベートーヴェンとウィーン

生誕250年によせて



第4部 ベートーヴェンと祝祭会議のウィーン

ナポレオンの失脚後、戦争の不安から解き放たれた祝祭的雰囲気の中、ヨーロッパに秩序をもたらすべく開かれたウィーン会議。時代の転換は、ベートーヴェンの創作にどのような影響を及ぼしたのでしょうか？

曲目解説

1814年、ナポレオン(1769-1821)率いるフランス軍に幾度となく攻撃されてきたヨーロッパの各君主国は、当のナポレオンの息の根を止めるべく、連合軍を結成して反撃に出る。やがて連合軍はパリに入場し、ナポレオンは失脚した。この出来事を受けてウィーンで上演され、人気を博したのが、歌芝居《良き報せ》^{ジングシュピール}である。テキストを書いたのは、宮廷劇場をはじめとするウィーンの有名劇場で監督を務め、台本作者としても活躍していたトライチュケ(1776-1842)だ。

あらすじは次の通り。ライン地方の村で居酒屋を営んでいるブルーノは、連合軍勝利の報せを今や遅しと待っている。いっぽう彼の娘のハンヒェンは、若い粉ひきのローベルトとの結婚を熱望しているが、彼が祖国防衛のために兵士となって戦場へ赴いている最中、村の金持ちのジューズリヒから言い寄られ、困っている。ジューズリヒはハンヒェンを娶ろうと、ブルーノにもうまい話を持ちかけるが、そこへやってきたのがローベルトの上官の突撃隊長。彼はローベルトをハンヒェンと結婚させるべく策を練り、「連合軍勝利の第一報をもたらした者に娘をやる」というブルーノの要求を実現させるべく奮闘した結果……？

以上のような内容のテキストに、当時ウィーンで活躍していた音楽家が分担で曲を付けた。序曲、第4・5・7曲はフンメル(1778-1837)、第2曲はギロヴェッツ(1763-1850)、第3曲はヴァイグル(1766-1846)、第6曲はカンネ(1778-1833)、トリの第8曲はベートーヴェン(1770-1827)という陣容。第1曲は、既に世を去って久しいモーツァルト(1756-91)の歌曲「クローエに」の旋律が一部転用されている。

このように連合軍の勝利を喜ぶ祝祭的雰囲気が満ち溢れる中、さらにそれを盛り上げたのがウィーン会議の開催だ。ナポレオン以降のヨーロッパ再編について、各国君主や政治家が集った国際会議であり、会議の合間には舞踏会や演奏会など、様々なアトラクションが催された。ベートーヴェンもこの会議に合わせて作曲をおこない、「ポロネーズ」はおりしもウィーンに滞在中だったロシア皇妃エリーザヴェタ

(1779-1826)に献呈されている。また、会議やその参加者と直接関係はなくても、連合軍の勝利からウィーン会議開催までの高揚感を念頭に、演奏や楽譜出版の機会を当て込んで曲を作った人々も少なくない。ベートーヴェンの甥カール(1806-56)のピアノ教師を一時務めたシュタルケ(1774-1835)の「**平和祝典**」もその1つである。

(小宮正安)